

東京バッハ合唱団 月報

[第 590 号] 2011 年 8 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604
Tel：03-3290-5731 Fax 専用：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.590

August 2011

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

前倒しに盛りあがった祝会

東京バッハ合唱団 創立 49 周年記念懇親会

大村 恵美子

来年 7 月 1 日に、合唱団は創立 50 周年を迎える。これまでにも、10 周年などの節目ごとには、特別の思いでそれぞれ充実した祝会を催してきた。

10 周年 (1972 年) 学士会館 (神田) お客様：辻荘一、田中忠雄、秀村欣二、高橋昭、須藤哲生、森井眞の各氏ら。20 周年 (1982 年) 学士会館 (本郷) ゲストスピーチ：遠山一行氏。30 周年 (1992 年) 獨逸亭 (新宿)。40 周年 (2002 年) 目白聖公会。

最近では、目白聖公会の、いつも月曜練習をしている集會場で、団員手づくりのおもてなしで親しく祝会を催すことが多かったが、50 周年ともなれば、ある程度広い会場でたくさんのお客様をお迎えすることになるだろう。となれば、その 1 年前の 49 周年は、どのような会になるのだろうか。今年は控えておこうとお考えの傾向もあるのではないかと心配があった。

もうひとつ。2 年ほど前から、春の荻窪音楽祭に荻窪教会で小規模のコンサートで参加させていただけるようになっていた。そして、今年の《口短調ミサ曲》を皮切りとする、バッハ 4 大合唱作品連続演奏 (2011-14) に、当教会の小海基牧師が、テノール団員として参加してこられた。これはまことに心づよく、ふだんの練習のなかでは、参考になるお話を伺ってみるような時間的余裕もなく、残念に思っていたので、このたびの祝会の目玉に、先生のお話をお願いしては、と考案ついた。これはまさに名案だった。

7 月 4 日当日は、なんと 20 人のお客様がいらっしゃり、おそらく半世紀中の最多数の一つとなった。その顔ぶれも、私にも初対面の方もふくめ、前回コンサートの聴衆の方が数名、長年来の団友・後援会員、団員の友人ご家族、小海氏のお話が聞けるのでという方々、ほんとうに老若男女さまざまのお客様が一堂に会されたのである。

団員も 20 数名、軽食やミニバザーの準備にせいっぱい立ち働いた。小海先生のお話「バッハのエキュメニズム」(当「月報」2 ページ以下に要約) をうかがった後で、多彩な顔ぶれのお客様方の新鮮なスピーチもいただき、最後に残された数分で、バッハの有名なコラール イェス わが心の愉しみ (BWV147 より) を参加者全員で合唱して、華々しいこの一夜を閉じることができた。

このところ、楽しい機運がつづいている。3 月の震

災直後に出版された『バッハ カンタータ・ハンドブック』(春秋社) が好評だそうで、インターネットの本通販サイトでも、一時期「一番ギフトとして贈られている商品」(amazon、18 世紀・古典派以前のクラシック音楽) の 1 位となった期間もあった。

つづいて、6 月 27 日朝日新聞「文化の扉」欄で、当合唱団の《口短調ミサ曲》日本語演奏の企画が、目につくような扱いで紹介されると、その夕の練習に早くも数名の見学者が現れ、ひきつづき数日で 70 件をこえる電話がかかった。練習日ごとに新しい見学者を迎えている。団の夏休み明け、8 月 27 日 (土) 29 日 (月) からはじまる後期の練習には、多くの新団員の登場となるにちがいない。

かくて、異常な今年の夏、私たちは、節電、猛暑、放射能恐怖にあえぐことなく、真正面作戦で生命謳歌の大事業にとりくむことになる。精神のアンバランス、身体の萎縮・おとろえとは対極にある、泰然とそびえるバッハの音楽が、私たちのゆくてを照らしてくれる。東京バッハ合唱団の創立 50 周年は、いまや前倒しに、実現の域に突入したのである。(主宰者)

写真。最上段は、当日のスピーチをしてくださった小海牧師 (左) と会場・目白聖公会の鈴木司祭ご夫妻 (その右)。以下は、当日のスナップ、アトラダムに。それぞれのお名前は省略させていただきました。提供、白井均氏 (B 団員)。



バッハのエキクメニズム

小海 基 (日本基督教団荻窪教会牧師)

東京バッハ合唱団が創立 50 周年記念の連続演奏を企画している数年間 (2011 年冬 ~ 2014 年春) とともに始まる、この 10 年ほどは、実は「エキクメニズム (教会一致運動)」にとってとても大事な年に当たります。「エキクメニカル」というこの奇妙な言葉は、「家」だとか「人間の住む地全体」を指すギリシア語「オイクメネ」からきており、「経済 (エコノミー)」も同じ語源です。

2012 年・・・カトリック教会が分裂ではなく一致へと大きく方向転換をした「第 2 バチカン公会議」(1962 ~ 65 年) から 50 周年。プロテスタント諸教派と東方正教会が「世界教会協議会 W C C」で、それぞれの洗礼・聖餐・職制の一致点と不一致点を明確に整理した「リマ文書 (B E M)」発表 (1982) から 30 周年。

2014 年・・・1054 年の東西教会分裂から 960 周年。

2017 年・・・1517 年のマルティン・ルターの宗教改革から 500 周年。プロテスタント側の「エキクメニズム (教会一致運動)」の出発点となったローザンヌ第 1 回信仰職制世界会議 (1927) から 90 周年。

2019 年・・・1999 年にカトリックとルター派で結ばれた「義認の教理に関する共同宣言」から 20 周年 (カトリックとルター派はこの「宣言」により互いに「兄弟姉妹」と呼び合い、相互陪餐をしあう関係にまでなる)

といった具合です。

この「エキクメニカル」な 10 年間の最初に、私たちの東京バッハ合唱団が「S・バッハの最終到達点であり最もエキクメニカルな作品であると指摘される《口短調ミサ曲》の日本語版初演から記念演奏会シリーズを始めるといふことに、私は神様の摂理のようなものさを感じています。

もちろんバッハが「エキクメニカル」であった (小林義武氏や川端純四郎氏の主張) かどうかについては、異論があります。伝記作家スメントもバッハは徹頭徹尾ルター派であったと主張しますし、大村恵美子先生とも関係深いシュヴァイツァーも「ヨハン・セバスチャン・バッハが〔カルヴァン派の中心地の一つ〕アムステルダムで生まれていたら、いったいどうなっていたらどうか？」と問いかけるくらいです。バッハが亡くなった時に遺した蔵書の中には、2 種類のルター著作集、ルターの卓上語録、家庭説教集、16、17 世紀の古ルター派の神学者のものが多くあったことを、伝記作家シュピッタも指摘しています。またバッハ作品にとって欠かせないのがパウロ・ゲルハルト (1607-1676) のコラール (ゲルハルトはブランデンブルク選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルムのルター派と改革派合同寛容令に反対して窓際に干された

ルター派牧師) であることも皆さんご存知でしょう。しかし果たしてバッハが厳格な「原理主義的ルター派正統主義なのか」と問われれば、ここに挙げた人たちも否を唱えるでしょう。

そもそもバッハには当時のいろいろな信仰が流れ込んでいます。敬虔主義、神秘主義……。音楽家としての出発点からライプツィヒ時代の教会カンタータ増産期までは、明白なルター派の教会音楽家として生きていたでしょうが、その途中、バッハが仕えたケーテン宮廷のレオポルド公は熱心な改革派・カルヴァン派でしたし、最後の《口短調ミサ》に至っては、どの教派の礼拝・典礼にも収まらない、ある種バッハなりの理想のキリスト教礼拝・典礼の「境地」のようなものさえ私たちは感じてしまいます (これでミサを行ったら、冒頭の「キリエ」だけでもカトリックの「ローマ典礼」にはとても収まらないとんでもない長さになるし、キリエ冒頭動機はなんとルターの定旋律を使用 !)。宗教改革陣営の音楽は「十字架の神学」の強調からある種重苦しくなりがちですが (確かにバッハの受難曲には良い意味でのその傾向を感じます) 《口短調》にはそれを突き抜けた「復活の先取り」というか「天的な明るさ」があるなあと私には感じられます。これは就職のためにルター派、改革派、カトリックと流れていったという話ではないと思います。ある種「エキクメニカル」な「境地」に彼が達したということではないのか、《口短調ミサ》こそは、ある意味「エキクメニズム」の先取りなのではないかと問わずにおれないものがあります。

だいたいキリスト教世界から見ると、この東京バッハ合唱団の姿こそが「エキクメニカル」に映るのではないのでしょうか。この合唱団のメンバーにはいろいろな人がいます。全人口の 1% もキリスト者がいない日本だけあって、ルター派はむしろ少なく、カトリックを含めいろいろなキリスト教の教派の人、無神論者、敬虔な仏教徒……と、実に多彩です。原語主義の合唱団というのなら音楽的興味のみから集まっているともしえるかもしれませんが、日本語上演にこだわる、つまり自分の内側から出てくる言葉 = 音楽としてバッハと取り組んでいる合唱団として、これはとても興味深い構成です。そして練習会場も本日の会場の聖公会をはじめ、いろいろな教派の教会堂が用いられ、先年のヨーロッパ演奏旅行でもカトリックのミサ (フライブルク大聖堂) の中で歌った数日後には、かつて宗教改革の時代にはカトリックと戦ったプロテスタントの礼拝堂 (シュトゥットガルト聖パウロ教会) で歌うといった具合に実に「エキクメニカル」です。

それはただしいことであるし、現在世界の教会が取り組んでなお途上にある「エキクメニカル」の道の先取りをこの合唱団はしているとさえ言えるのかもしれませんが。そもそも聖書においては、ある教派の教会の壁の外に

は救いがないなどと書かれていません。新約聖書では「主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ、すべてのものの父である神は唯一であって、すべてのものの上であり、すべてのものを通して働き、すべてのものの内におられます」（エフェソ 4:4,5）と書かれています。また旧約聖書はユダヤ人だけが「神の民」で救われるというのではなく、救いは全ての人に、全ての被造物に「エキュメニカル」に及ぶと語るのです。クリスマスの聖歌にもなっている有名な聖句ですが、「エッサイの株から一つの芽が萌えいで[...] 狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蝮の巣に手を入れる。私の聖なる山においては何もかも害を加えず、滅ぼすこともない」（イザヤ 11:1,6-9）がありますし、受難の出来事と関係深いゼカリヤの預言の終わりは、「その日〔終末の主の日〕には、馬の鈴にも、『主に聖別されたもの』と銘が打たれ、主の神殿の鍋も祭壇の前の鉢ようになる。[...] その日には、万軍の主の神殿にもはや商人はいなくなる」（ゼカリヤ 14:20,21）と結ばれます。また、ルツ記のルツはモアブ人、ヨブ記のヨブはウツ人、預言者ヨナが遣わされたのは二ネベ、といった具合に聖書は決して民族的でなく、全世界的に救いを語っています。

バツハ(1685-1750)の生きた時代というのは、ルター派にとってはガチガチの正統主義の時代、カトリックにとっては対抗宗教改革でさまざまな手は打たれるものの、むしろ反動的な政策が進められた、信仰的には不幸な時代だったのではないのでしょうか。「中世のカトリックが墮落したので、宗教改革が行われた」というような「歴史観」で私たちは神学校でも教育を受けたものですが、宗教改革が起こってから20世紀に「エキュメニズム」がプロテスタント・カトリック両陣営に再自覚されるまでの時代は、中世カトリック以上に信仰的には不幸な時代だったのかもしれない私は思っています。確かに中世カトリック教会には聖職売買(シモニズム) 十字軍が持ち帰った怪しげな聖遺物の氾濫.....といった行き過ぎがありました。ルネサンスから近代と「国家」への目覚めが起こる中で、1517年ヴィッテンベルク城教会の扉に、贖宥状(免罪符)をめぐる33歳のマルティン・ルターが「95箇条提題」を張り出し(実際は送り付けただけ)「聖書のみ」「信仰のみ」「2つの sacrament」「司祭の独身制、マリア聖人崇拜の廃止」「説教中心」.....を旗印に宗教改革は広がります。実にヨーロッパの半分はプロテスタントに変わる勢いで、初期は改革の恵みに満ちた時代でした。

しかしそのあとの時代がいただけません。カトリック陣営では、プロテスタントに対して教皇パウロ3世はトリエント公会議を開き(1545-49)「聖書と伝統」「信仰

義認だけでなく善きわざも大切」「7つの sacrament」「教会の位階制度は必要で、キリストによるもの」「化体論」を強引に推し進めます。ヨーロッパ以外への宣教をイエズス会が中心となって推し進めたのは良いとしても、西欧のアジア・南米・アフリカ侵略と重なってしまいます。カトリック陣営ばかりでなくプロテスタント陣営でも教条的な「正統主義」の時代を迎え、異端審問・宗教裁判、宗教戦争(ドイツなら三十年戦争) 厳格な「予定論」の強調による分裂の応酬.....といった嵐が吹き荒れます。それはバツハの時代の後も実に20世紀前半まで続いていきます。教皇ピオ9世(1846-78)下のウルトラ・モンタニズム(山の向こう)運動、第1バチカン公会議(1869-70)における「教皇首位権・不可謬権」「聖母マリアの無原罪」の確定、モデルニズム(モダニズム)排斥のためのスパイシステム.....。ファシズム・ナチズムと接近したピウス11世、12世の終わる1958年までカトリック陣営でも繰り返されていきます。プロテスタント側も無味乾燥な正統主義がはびこり、そして分裂に次ぐ分裂の連続です。

そうした信仰の荒廃に対抗するかのように啓蒙主義、敬虔主義が教会の内外に起こるのは当然のことです。バツハにはそうしたものも流れ込んでいます。神学校での私の師のひとりである川端純四郎氏は最近出した『J・S・バツハ 時代を超えたカントール』(日本キリスト教団出版局、2006)の中で、このバツハの「エキュメニズム」は、「音楽史的共同体」の中で起こりえたものだと指摘しています。つまり、バツハが音楽家として誠実に音楽史の中に「深く分け入って、パレストリーナやロカテリ、カルダーラ、バッサーニ、ケルル、ペルゴレージ等の作品の写譜を続ける中で、これらのカトリックの作曲家たちの音楽が、自分のルター主義信仰の音楽に取り入れられることに気づい」たからだと言及します(同書208頁)。ケーテン宮廷でもすでに同じような喜びの経験をしていたバツハだからこそ、最晩年に《口短調ミサ》においてある意味「エキュメニズム」の先取りができたのだということです。

さてそうした《口短調ミサ》を歌う私たちにとって、現代の「エキュメニカル運動」はどこまで進んでいるのが気になるところです。冒頭に掲げた年表のように、20世紀に入ってプロテスタント・カトリック両陣営とも分裂から一致の方向へ大きく舵を切り始めます。プロテスタント側はエディンバラ世界宣教者会議(1910)やローザンヌ第1回信仰職制世界会議(1927)から、カトリック側は教皇ヨハネス23世が召集した第2バチカン公会議(1962-65)から大きく変化しはじめます。

しかし実態は、世界教会運動初期は、プロテスタント側は自分の教派の正統性・必然性ばかりを弁護する「比較教会論」ばかりが中心に論じられ、カトリック側は自分たちは不変化でプロテスタントが戻ることがエキュメ

ニカルなのだという認識で、いつまでも一致への手掛かりが得られない空論ばかりが費やされていきます。

このまさに初期の世界教会運動に風穴を開けたのが、カール・バルト(1886-1968)やディートリッヒ・ボンヘッファー(1906-1945)であり、またアジアやアフリカの若い教会の声だったのです。既に1927年のローザンヌ会議から教派を超えた一つの教会としての聖餐の「相互承認」、「相互陪餐」が模索されていましたがいつまでも決着が付きません。このままの分裂と自己正当化の応酬の状態では2つ目の世界大戦も食い止められないという焦燥感の中で、1937年のエディンバラ会議あたりから、バルトやボンヘッファーの影響で、世界教会運動が「比較教会論」から「主イエス・キリストによる一致」といった「キリスト論」への前進が主張されるようになります。同じ1937年に、聖餐・主の晩餐をめぐる教派間の教理的違いは本質論である「主ご自身が晩餐の恵みである」点に関係しているのではなく、単なる「晩餐における主の自己伝達の仕方」の違いにすぎないとしたドイツ告白教会の古プロイセン合同教会第4回告白会議「ハレ会議決議」が出されます。これはヒトラー政権への抵抗の一つである「告白教会運動」の始まりとなったけれども聖餐問題については回避してしまった、1934年の「バルメン宣言」を一歩進めるものであり、1937年WCCエディンバラ会議はその影響を与えます(H・ゴルヴィッツァー)。他にもないこのエディンバラ会議にインド合同教会からV・S・アザリヤが参加し、アジアのコンテクストでは教派乱立がいかに宣教的躰きであるかが語られ、未受洗者陪餐の課題さえも考えられてよいのだと、信仰職制世界会議の場で初めて提起されることとなります(神田健次『現代の聖餐論』日本キリスト教団出版局、1997)。注目すべきはこのアザリヤの呼びかけが、「1930年代から40年代にかけての教会合同運動を促進」していったことです。

まだまだ世界の教会はこの「エキュメニカル」な道の途上にあり、聖餐式の「相互陪餐」もごく一部の教派間で実現されただけに過ぎず、まして教派合同はごく一部で起こっているに過ぎません。同じ聖書的宗教としてのユダヤ教やイスラム教との対話も始まっているものの、例の2001年の「9・11テロ」やパレスチナ問題で遅々としか進みません。残念なことです。バツハが達した境地には遠く及ばない現実があります。

初期の「エキュメニカル」運動を担ったボンヘッファーの思いを最後に紹介しておきましょう。ここに初心があります。この獄中詩「キリスト者も異教徒〔非キリスト者〕も」には聖餐を暗示する「パン」という言葉が、「困窮」と並んで1~3節全てで繰り返され、3節ではなく「彼のパンをもって体と心を満ちたらせ」る対象が「困窮のなかにいるすべての人間」だと歌うのです。ヒトラー暗殺計画に加わったとして逮捕され、獄中にあったボンヘッファーの最期は強制収容所での絞首刑でした

が、獄中で彼は第二次大戦後のエキュメニカルな教会の姿をこの詩に託しています。

キリスト者も異教徒〔非キリスト者〕も

D・ボンヘッファー

1.

人々は自分たちの困窮の中で神に行き、助けを嘆願し、幸福やパンを乞い、病気、罪、そして死からの救いを求める。彼らは、キリスト者も異教徒〔非キリスト者〕もみなそうする。

2.

人々はご自身の困窮の中におられる神に行き、神が貧しく、辱められ、枕する所もパンも持たないことを発見し、罪と弱さと死に飲み込まれているのを見る。

キリスト者は、苦しみの中にある神のかたわらに立つ。

3.

神は、困窮のなかにいるすべての人間のところに行き、彼のパンをもって体と心を満ちたらせ、

キリスト者と異教徒〔非キリスト者〕のために十字架の死を死に、

彼らのいずれをも赦す。

キリスト教の最初の千年は迫害の時代を経て世界宗教になった「正教の時代」でした。しかしその栄光の絶頂期(西暦1000年代)に「東西教会分裂」が起こり、正教会はユダヤ教やイスラム教から聖画像問題を中心に、その信仰は聖書的なかを問われることとなりました。

次の千年は「西方教会の時代」でした。しかしその栄光の絶頂期(1500年代)に「宗教改革」が起こり、後は教派分裂に次ぐ分裂の時代になってしまいました。全教会ばかりでなく全人類、全被造物が、ユダヤ教・イスラム教・キリスト教の不寛容と不一致とによる争いが地球を破壊してしまうのではないかと、との問いに立たされたのが21世紀初めのテロとその報復の連鎖の戦争でした。

新しい第3の千年は「エキュメニカルな時代」でなければキリスト教の存在理由さえも問われかねない時代に入ったといえるでしょう。

バツハの《口短調ミサ曲》を、そうした世界の問いかけの音が渦巻く真っ只中で歌い上げていく意義は大きいと、私は思っています。

第106回定期演奏会(創立50周年記念公演)

《口短調ミサ曲》日本語演奏初演

[日時] 2011年12月3日(土) 14:00 開演

[会場] 杉並公会堂(東京・荻窪)

チケット発売中。前売: 3500円(全席自由席)

事務局までお申し込みください。